

平成21年度 明星学園 / 第二明星学園 支援運営方針

1. 基本的理念

昔…… (20年ほど前) …。

手首を血だらけになるほど噛み、腹部を引っ掻き、頭を壁にぶつけ、扉を足で蹴り倒す。その方の前で明らかに僕らは無力だった。傷を治すためにアメリカンフットボールのヘルメットをかぶり、特製のプロテクターで手首を覆った。そんな対症療法が僕らの仕事の慰めだった。

ガラスを割り、幼い子の手指を骨折させ、服を破り、食事を壁に塗りつける。やはりその方の前でも僕らは無力だった。彼に情熱をこめて人生を説くことが最高の支援であると勘違いをしていた。バランスを欠いた情熱は、専門家として欠いてはならない支援を客観的評価するという姿勢を麻痺させていた。

掃除がイヤだといったは泣き叫び、食事が待てないといったは泣き叫び、じっとして居たくないといったは泣き叫ぶ。その方の前でも僕らは無力だった。雑巾がけができるようになり、食事が待てるようになり、じっとしてられるようになった先に、何があるのか、それを指し示すことができないまま、できるようになることだけに目標が置き続けられた。

しかし……。

僕らは今『物語としての人生』という行動理解の方法【資料1 Kさんが泣いた】と『向かう心の支援』という係わりの方法【資料2 一人前の気持ち】を手に入れ始めている。『物語としての人生』とは、その人の人生を丸ごと理解しようという方法であり、『向かう心の支援』とは、その職員にとって、いちばん身近な人、それは例えば家族や友人だが、その方に向ける気持ちと同じような気持ちを、たとえどんなに重い知的障害のある方であってもきちんと向けてみるという支援の方法である。

叱責しなくても、お説教しなくても、訓練しなくても、取り上げることをしなくても、おそらく与え続けることによって、お互いに<幸せ>になれる方法を手に入れ始めている。

それは、「I am OK, You are OK」という支援である。ちょっと考えてみて欲しい。怒鳴って相手を指示通り動かした時、怒鳴った本人は、おそらくご満悦だろう、やっぱり自分は指導力があると。これは「I am OK」の状態である。しかし、怒鳴られたものの立場になれば、これは不快な状態であり、たとえそのときは言うことを聞いたにしろ、心の奥には、恨みと憎しみが沈殿している。これは「You are not OK」の状態である。「I am OK, You are not OK」では、お互いに幸福にはなれない。これは強者のみが幸福を享受できる方法である。さらに考えれば、怒鳴って手に入れた「I am OK」は、本当に幸福の場所にその人を誘うことができるのだろうか？ 40年、怒鳴り続けてたどり着いた場所は、おそらく荒涼とした孤独の地だろう。ぼくらが目指すのは明らかに「I am OK, You are OK」に通じる道である。その場所はおそらく誰もが「共にいる」ことを感じる空間であるはずだ。

伝えたい何かが伝わらないとき必ず<服を脱ぐ>彼女がいた。そんな時、僕らは決して<服を脱いじゃいけません>とは言わない。頭ごなしに<服を脱いじゃいけません>と伝えることは、究極の伝達的手段として、自分のプライドを捨てて、服を脱ぐことを選択せざるを得なかったその人に、<あなたは自分の想いを回りの人間に伝えようとしてはいけません>ということに等しいからだ。【資料3 幸福のかたちパート・パート1】

人間は、伝えるために生まれてきている動物だ。皆さんは知っているだろうか、生まれたての赤ん坊の2つの目、その焦点距離は50cmのところにあることを。その50cm、母親が授乳のために赤ん坊を横抱きにし、その赤ん坊の向けられた視線の先、50cmのところにあるのは母親の顔なのである。生まれたときには、すでに赤ん坊は母親の存在を、つまりは他者の存在を遺伝子の上に乗っけて生まれてきているのである。これはコミュニケーションを前提に生まれてきていることを如実に示す真実である。「どんな方法でもいい、その想いを伝えていいんだ」これが支援者の第一歩目のスタンスである。

眠れなくて一晩中歩き続ける彼が居た。そんな時、僕は<今日は眠れないんだね、一緒にいるから大丈夫だよ>と要求されるまま手をつなぎ、できるだけ一緒に歩いた。なぜなら彼には起きている権利がある【資料4 至福のとき、そんな夜は眠れない】からだ。

人間には二つの自由がある。それは「選択の自由」と「失敗の自由」である。ここでは「寝るか寝ないか」、そして「寝なかった時の苦しさ」を指し示すのであるが、全てが自由の上に保障されなければならない。犯されたくない自由は、まずは人間の生理的要求に根ざすものである。それは「睡眠」「排泄」「食事」である。いつ寝るのか、いつオシッコやウンコをするのか、そしていつ食べるのか、それが命令形の中で、「寝る時間だぞ」「オシッコ、ウンコへ行く時間だぞ」「食事の時間だぞ」で支配されれば、そこはもう塀の中と同じである。「選択の自由」が与えられて、初めて人間は悩むことができるのであり、悩むことが人間を大きくするのである。また、悩んだ末の答えがたとえ失敗につながっても、それによって生じた自己責任が、人間を大きくしていくのである。知的障害者には無理だろうって？それは実践家が口にすべき言葉ではない。実践して確認すれば、どんなに障害が重い方であっても、自己選択と自己責任の道は拓かれていることが実感できるだろう。

かれこれ20年間、目を硬く閉じ暮らし続ける彼女がいた。そんな彼女に僕は<何もかも一人でやろうとするなよ、ここに僕らがついている。やりたいこと、助けて欲しいこと何でも言って欲しいなあ>と伝え続けた。だって<幸せ>はたった一人が我慢することによって作り上げるものじゃないから。【資料5 わたしさえ我慢すればの幸せ】

自分から好き好んで、入所施設に入ろうなんていう方はほとんどいない。ましてや明星学園は児童入所施設であったから、メンバーさん方の入所は5才、6才である。そんな子どもの年令で、「ぼくは知的障害を克服するために、早く親元を離れて訓練に励むんだ。」なんて絶対思わないだろう。特別養護老人施設に入所する高齢者の方々が「私が特養に入所さえすれば、息子や嫁にこれ以上の迷惑をかけなくてすむ」と考えるのと同じように、目を閉じ続けながら彼女は、「私さえ明星学園に入所すれば、私さえ明星学園で我慢すれば、お父さんやお母さんにはこれ以上の迷惑はかけなくてすむ、お父さんやお母さんにはもっと幸福になって欲しい」と考え続けていたのだ。

僕らの支援の方法は、まずもって利用者の方々の“本当の気持ち”を大切にするという意味で『お心主義』【資料6 ぼくらのお心主義】である。しかし、多くの方々が発語をコミュニケーションの手段として持たない重い知的障害のある方々との係わりの中で“本当の気持ち”に到達する術は、生半可な道じゃない。

本当の気持ちが伝わりさえすれば、<いつかきっと、いつかきっと変わるから>

適切な支援さえあれば、<誰にでも自分を変えていく力が自分の中にあるのだから>

僕は絶え間ない行動観察を続け、行動理解のための仮説を同時並行的に立ち上げ、仮説検証のための実践を“本当の気持ち”にたどりつくまで繰り返す。【資料20 名探偵コナンへの道 ホップ編、ステップ編、ジャ

ンブ編】決して途中で挫けないタフな気持ちと絶対にうまくいくと信じる楽天性を武器にして。この方法を明星学園では「名探偵コナンへの道」と称す。一方、アメリカ自閉症協会の言葉では、「Solve the Puzzle!」という。意味するところは全く同じである。

そんな僕らの方法 - お心主義 - を支えているのは、『抱っこ法』『(乳幼児)精神分析』『TEACCHプログラム』『臨床動作法』『マカトン法』 - 療育の5本柱 - から得た知見と哲学である。

『抱っこ法』からは、健常(定型発達)といわれる我々と重い知的障害がある方々とは人間的にはなんら変わらない存在であること、パフォーマンス(できる or できない)という点を取り上げれば健常(定型発達)といわれる我々が圧倒的に優位、例えば $1 + 1 = 2$ についての理解の方法、スピード、箸を持つといった能力の獲得等考えてみればいい)であるけれど、情緒的な側面(悲しい、悔しい、心配だ、不安だ、怒り、嬉しい、楽しい、やさしさ、思いやり等)から考えれば全く同じだということ、そして時には我々よりも豊かな感受性を示す【資料7 お心はメロディにのせて】ことがあることをいつも教えられている。

僕らの支援は、「癒し」と「励まし」のバランスの上にある。それは「母性的な係わり」と「父性的な係わり」と置き換えることもできる。同じ方への係わりが、その重点を癒しから励ましへシフトする、また同じ方への係わりでも、癒し担当と励まし担当とに職員の役割を分化させる。横に縦に、「癒し」と「励まし」が錯綜しながら支援は展開していくのである。

『(乳幼児)精神分析』からは、自分らしい人生を歩むためには主体的な動きこそが大切【資料8 和解への道筋】であり、その主体的な動き(自己選択、自己決定)を見守り、保障することが肯定的な自己像を形成していく【資料23 あしたのために その1】ための必要条件であること、また人間の理解とは、一つ一つの行動の積み重ねとしてではなく、複雑に絡み合った人間関係の集合体として、今まで生きてきた人生丸ごとを説明できなければ不可能であることを教えられた。

また、言葉を上手に繰れない知的障害、自閉症の方々にとって、身体の変化、行動の変化を通じて表現される様々な伝達内容の理解、これを現象学的な理解という【資料28 ハイチューふたつ ファンタグレースふたつ】が、これこそが、彼らの本当の気持ちを理解するのに欠くことができない方法であることを教えられている。

『TEACCHプログラム』からは、闇雲に我慢することや待つことが、どれだけ人間の心に心理的な負荷をかけ、不安や焦燥感を増幅させるのか、そして、同じ我慢するにしても、先の見通しを持って我慢することが、いかに人間を落ち着かせ、穏やかにし、適応力を高め、安心させるのかを学んだ。

このTEACCHプログラムの主要な概念である「構造化」の手法は、簡単に言えば「その人にとって、わかりやすく伝えること」であるが、支援のスタートはまずそこにある。未開の、初めて訪れる外国の地のような何もかもがわからない場所に住み、暮らすような不安感、孤独感の中では、決して豊かな暮らしなど成立しないのだから。

『臨床動作法』からは、待つこと、信じることの大切さを教えられている。期待に応えようと頑張りたい主体が、今、目の前にいるという実感を手に入れることができる。動作課題に向うときの係わりには、日常的な支援の凝縮があるのである。「こうしてみない?」「できるかな?」「そうか、難しいのか」「そうか、イヤなのか」「そうそう、頑張れるじゃないか」、動作課題を遂行する時のこのようなやりとりは、日常的な支援へ般化させることができるのである。いふならば、動作法的支援というわけだ。

僕らは、絶対できるようになると、どこかで確信しながら、そのアプローチの方法は様々であること

を動作法を通じて学び取ることができる。たとえ重い知的障害があっても、何かを少しでもやり遂げたいと思っている主体なのであることを、目の前で感じるのが、個として尊厳する道にも通じる。

『マカトン法』は、伝わるのなら何でもいいじゃないかというコミュニケーションの基本を僕等に教えた。伝わることの嬉しさを教えてくれた。

写真カードを多用するようになって、現在ではその必要性が減じてはいるが、覚えていれば、つまり記憶している頭だけ持参すれば、支援としては成立するこの支援方法は、施設では常に有効である。

さあ、ここで我々の職業の専門性について考えてみたい。

今<専門性とは何か?>と問われて、こう答えるでしょう。

『個々の障害特性を理解しながら、その方の主体的な生き方を保障するために、彼らの<本当の気持ち>を理解することのできる方法を獲得し、またそれを検証する実践ができることである。』と

この専門性の定義には、二つの側面がある。一つは、<本当の気持ち>を理解するという豊かな共感性、センスである。そしてさらに一つは<本当の気持ち>がわかった時に、その願いをかなえることができるような支援が実践できるかという行動力である。

共感性、センスはもちろん大切だが、我々は後者の実践力をより大切なことだと考えたい。そしてこの実践力は「学び」によらなければ身につかない。

「私たちの仕事は、昨日と違うその人を発見することですよ」これはある先輩職員が残してくれた言葉である。あるいは「僕らの仕事はホテルの客室係(今風であれば、コンシェルジェというところか?)と同じですよ。これから夜勤に入ります。何かご要望、ご不満の点がありましたら、すぐにお申し出下さいですから」これもある先輩職員が残してくれた言葉である。いずれも僕らの仕事の専門性を鋭く言い当てている言葉である。

「昨日と違うその人を発見する」ためには、その方にまずもって関心を寄せなければならない。細かな観察能力も必要である。関心を寄せるということは他ならぬ共感するための第一歩の姿勢である。

また、僕らが提供する実践は、必ず「快」を伴わなくてはならない。僕らの仕事は、対人間相手の仕事である。これを感情労働と呼ぶ。感情労働者は「快」の提供者であり、サービス提供者である。叱ることでさえも「快」を目指さなくてはならないのである。誰が目指すにしろ、困難な道だろう。40年、この仕事に従事しても、答えは見つからないかもしれない。しかし、感情労働に従事している以上、目指さなければならない道なのである。(その答えのヒントは、罪を憎んで人を憎まずという言葉の中にあることはわかっているのですが...)

僕らの実践はどこへ向かおうとしているのだろうか? <本当の気持ち>【資料9 本当の気持ち】を理解し続けた先には何があるのだろうか。

それを考えるヒントは自分自身に次のように問うてみたところにあるのではないと思う。

それは、「幸福ってなに?」「生まれてきて良かったと思う時はどんな時?」「生きがいを感じる時ってどんな時?」「自立ってなに?」「自律ってなに?」というような質問群である。

どの質問にも、おそらく正解はない。答えは人それぞれである。しかし、誤ってはならないのは、この質問の答えを出そうとする時、健常(定型発達)といわれている我々と重い知的障害がある人とを分けて考えてはならないのである。質問はみな、人間の営みに関することばかりである。重い知的障害のある方々だって人間であるのだから、この答えは人間全てを説明するものでなくてはならないのである。

それは、今まで自分が培ってきた常識を一旦捨てることから始まるのかもしれない。僕らの常識は、重い知的障害の方々を仲間を含めることをしない世界で作られたものである。僕らは「お心主義」を武器にしてこの仕事にたずさわるとき、この重い知的障害ある方々を仲間に入れて常識を作り直さなくてはならないのだ。

僕は重い知的障害のある方々にとって行動全て（自傷、他害、パニック、下痢、てんかん発作、便秘、反復強迫行動、不眠、断続眠、自律神経症状……）が発信だと考える。これだって新しく手に入れた常識だ。

弱い立場の人間は、もちろん重い知的障害がある方々を含めて、自分はみんなに迷惑をかけている、自分は駄目な奴だ、自分が生まれてきたばかりにお母さんは苦勞している【資料10 わかっちゃいるけどやめられない】、自分ひとりさえ我慢すればみんな幸せになれると考えている。こんな事実も新しく手に入れた常識である。

例えば自立はこうなる。＜自分の人生は自分で決めながら自分らしく生きること＞【資料22 たった一つの自己選択でさえも人生を変えることがある】

例えば自律はこうなる。＜自分の決めた目標に向かって、主体的に努力していくことができる姿＞
これだったら、僕らと重い知的障害がある方々とは同じ土俵である。

今、幸福を「大人になること」と考えてみよう。彼らにとっては「お兄さん」や「お姉さん」になることと考えるもいい。

大人になること、それはたくさんの人と多様な場面で折り合いがつけられるようになることである。しっかり自己主張をしながら、ゆずったりゆずられたりが柔軟にできる姿である。

また、大人になることとは、たくさんの人を好きになれる【資料12 汗かく三様】、上手につきあうことができるということである。お母さん以外に、お父さん以外に、職員以外に。

たくさんの人を好きになれるということは、肯定的な自己像の持ち主であるということである。自分に自信がない人、自分は駄目な奴だと思っている人間（否定的自己像）は、人を好きになれないからである。

肯定的な自己像の持ち主は、人をちゃんと好きになって、きちんと別れることができる人である【資料26 別れの風景に添えて】。一番大好きな母親は、自分より先に亡くなるに決まっている。きちんと別れられなくてどうする！？

そして肯定的な自己像の持ち主は、人に感謝することができる人である【資料24 私だってありがとうを伝えたい】。知的障害者として生まれた故の妬みや恨み、入所施設での大集団生活が生むいくつもの不当な我慢から来る憎しみや怒りを越えて、ありがとうを伝えることができる人である。幸福になるためには、ちょっと大変な、いくつものハンディキャップを持った彼らが、全てを飲み込み、咀嚼して、消化したその先には「感謝」が待っているのである。

そして大人は、自分のことを自分で主体的に伝えることができる人である。つまり、『そのひとにこのことを わかりやすいかたちで 直接 伝える』ことができる人である。

気持ちをわかってくれない職員に対して怒りを感じているのに、それをガラスにぶつけてしまう人、自分の手を噛んでしまう人、これは大人じゃない。職員に怒っていれば、職員を叩けばいいし、噛めばいい。その方がずっとわかりやすいし、直接的だ。

見捨てられるのが恐くて、イヤと言えないその人も大人じゃない【資料 11 あしたのために その3 見捨てられ不安】、ニコニコ笑って、イヤなことをしていたんじゃ、誰もそれをイヤだなんてわかってくれない。ちっともわかりやすくないじゃないか。

3日も4日も経ってから、前のことを怒りだしても、そんなことは誰も気がついてはくれまい。本当の気持ちはできるだけそのときに表現した方が、自分もわかりやすいし、回りもずっとわかりやすいのだ。

嬉しかったや楽しかったは、人に伝えやすい気持ちである。ところがそれに比べて、苦しいことや挫けたい気持ち、頑張りたくない気持ち【資料 25 あしたのために その2 がんばらない】、そして主観的にはわがままだと思う気持ち、そして助けて欲しいという気持ちは伝え難いものだ。自分の弱みを見せることだからね。でもこれが上手にわかりやすいかたちで伝えられてこそ『幸福』ってやつじゃない？

2. 具体的実践事項

穏やかな暮らしと主体性の保障

「イヤ」を受け止めて【資料 13 お父さん、僕は本当はニンジンが嫌いです】

一人一発達遊び、動作法、抱っこ法、音楽リズム、感覚機能等、いずれの日課活動場面においても、さらに食事、排泄、入浴等のADL支援場面においても、彼らの「イヤ」をしっかり受け止めることにより、穏やかな暮らしの基盤としたい。それが他でもない彼らの主体性を保障していく第一歩である。

イヤなことは日課や活動だけではない。感覚障害（味覚、触覚、聴覚等の過敏等）に起因する訓練や我慢や慣れでは、とても克服しようもないイヤなことも、この世の中にはいっぱいだ。行動障害を示す彼らの多くは、我慢できないのは自分が悪いのだと、自分を責めながら、イヤなことをイヤと思わないような心理的な努力をしながら、息も絶え絶えにここまでたどり着いている場合が圧倒的に多い。なにを伝えても責められない環境を整えながら、どんな小さな彼らのイヤでさえも認めていく努力が信頼関係を築いていくのである。

ああしたい、こうしたいに寄り添う

ただ「イヤ」だけだった自己主張が次第に目に見える形の要求（デマンド）をとるようになってくる。その1つ1つが最初はわがままであるかのような様相を呈するが、ノーマライゼーションという視点から客観的に見ると、当然の暮らしの姿、幸福を求める姿であることが多い。施設の限界、集団生活の限界を知りながら、少しでも工夫をし、その限界を超えていこうとする努力を積み重ねながら、一つ一つのデマンドに寄り添っていきたいと考える。そのデマンドに寄り添う姿は、重い知的障害の方々に発信の自信を与え、間主観性（私が大切にしているものを、あなたが知っているというのを、私は知っている）を育て、やがてかたちとしては見えにくい本当の幸福の形（ニーズ）を発信していけるエネルギーになっていく。

その目標の姿をいまインパクトターゲットイメージと名付けよう。（完全にパクリですが）

あれ食べたい、これ食べたいから始まった要求（What）が、あの店で、この店で（Where）に広がり、それが認められれば、今度は関心がオシャレに向かう。

一方、お母さん、私のことを好きですか？の解決が終われば、お父さん、私のこと好きですかに、そして兄弟、お嫁さん、そして甥や姪までにその関係が広がっていく。途中で夫婦仲良くしてねなんていう要求までを伝えたい方までいる。

お父さん、お酒飲んで欲しくないなあ、仕事無理してるんじゃない？身体、大事にしてねと心配する方まで出てくる。

ばくの障害なおりますか？なんて聞く方まででてきて、本当に僕らを困らせるのである【資料 27 解ってもらえるまであきらめないぞ 前編 中編 総集編】。

インパクトターゲットイメージは千差万別、数限りないのである。

折り合いをつける

実は人間関係というものは、「ありがとう」とか「ごめんね」とか「がまんしてね」とかを交わしながら、ゆずったりゆずられたりして、一人一人を大切にすることによって成り立つものだ。そして、ゆずられた経験なしには、人は心のそこから何かをゆずることは難しいものだ。しかし、強い立場のものは、知らず知らずのうちに良かれと思って押し付け、弱い立場のものは、見捨てられるのが恐いが故に我慢していく構造【資料 14 どっちが支えられているのかわかりやしない】は、この知的障害の方々との関係において、いとも簡単に成立してしまう現実がある。職員は、その強者の論理の側にいることを自覚しながら、どれだけ誠実に「ありがとう」と伝え、どれだけ真剣に「ごめんなさい」と言えるかが「折り合い」の出発点である。

「ねえ、どうする？」の意味

たった一つの自己選択でもそれが人生を変えることがあることを今僕らは知っている。いかなる場合も、排泄でも食事でも、相手の発信がはっきりしてようが、してなかろうが、いつでも僕らは『ねえ、どうする？』なのである。それが僕らの彼らを大切にする姿である。今のあなたの行動を、私は今 のように理解しましたが、それであなたはどうしますか？というキャッチボールの連続が支援になるのである。

伝える方法はなんでもいい。視線でもいいし、身振りでもいいし、もちろん発語でも、絵カードや写真カードもいい。【資料 15 父さん、母さんと電車に乗った日】

一人前の保証（一人の大人として扱う）

頭ごなしでは関係が育たない

例えば「テレビばかり見てないで宿題をしなさい」と言われたとき、人間関係には、「全くうるさいなあ」と思ってしまう関係と「そうだな、もっともだな」と思える関係があるのは、想像できるだろう。自分を否定し、認めてもらえない関係では、指示がうるさく感じ、見守り、認めてくれている関係では、指示がすんなりと入るのである。

相手の発信を受け止めようとせず、いきなり自分の発信を押しつける関係では、良好な信頼関係は育たないし、相手の存在の全否定につながってしまうのである。まず受け止めて、それから自己発信する。それが大人の関係である。

お小言はもういらない

訓練やしつけという名のもとに、彼らはどのくらい叱られたことだろう。「そうしちやいけない」と伝えることは、「そんなことをしているあなたは駄目な人です」あるいは「そんなことをいつまでもしているあなたは嫌いです」と実は伝えることだ。【資料 16 不幸にしてバレー部のキャプテン】

叱って効果があったか？叱って行動変容があったか？冷静に考えてみればいい。ほとんど役にたっていないことが解る。十年やって行動変容が起こせないのなら、二十年やって行動変容が起こせないのなら、その方法は間違っているのである。

さらに、誰でも自分の人生を振り返ってみればいい。小学生高学年頃、中学生頃から「うるさい、このくそばあ」と母親のことを感じ始めた自分を思い出すことができるだろう。

彼らだって同じである。

いつでも「なあに？」

知的障害の重い方々にとってその行動全てが発信活動である。【資料 17 今あなたはあなたのことを一番大切に下さい】表現すること、それが伝達である。彼らは、常に相談されるべき、意思を確認されるべき、情報を提供されるべき主体的な人生を歩む一人の人格である。それをないがしろにすることなく一つ一つの実践に確実な検証を行っていきたい。自分にとって一番親愛な人間に向ける想いと同じ想いを彼らに向けることのできる職員でありたい。

重ね合わせる気持ち

僕らの仕事は、知的障害といわれる彼らと健常といわれる僕らとの違いを探ることではない。目が二つ、鼻が一つ、口が一つと同じレベルで、お心の同じところを探していこうとすること、それが仕事である。例えば夜眠れないとき、まず自分が夜眠れないときはいったいどんなときなのだろうか？と問うことから共感の出発点としたい。それがわかったとき、初めて相手の気持ちと重ね合わせてみるのである。

情報提供と説明責任そして相談すること

いくら自己選択、自己決定などといっても、それには豊富な情報提供とわかりやすい説明があってこそ可能である。

外食のメニューの決定、買い物の内容、訪れる店、帰省日、帰園日、帰れない理由、約束の日、約束が変更になる理由、旅行の行き先、日程、……。あらゆる機会において、情報の提供と説明に労を惜しんではならない。

そしてそれは、とりもなおさず相談することである。情報を提供すればいい、説明責任を果たせばいいというだけではないのが、コミュニケーションである。言いつ放し、伝えっぱなしでは、結局はやりとりの能力は育たない。常に最後は、それであなたは思うか？である。

エンパワメントを育む

ポジティブメッセージシャワー【資料 18 握り締めた手の向こうに】

個別的な作業能力、障害特性に合わせた課題、生活場面を用意することによって、一人前を保証し充実感を味わえる時間、瞬間、場を提供したい。成就感の積み重ねこそが、あるいはそのポジティブメッセージこそが、バッドセルフイメージからポジティブセルフイメージへの転換を創造し、未来を期待することのできる人格を生み出すことができる。

さらに、ポジティブメッセージはこれにとどまらない。「この服似合うね」「頑張っているんだね」「笑っている顔、素敵だよ」……。どこでも、いつでもポジティブメッセージは転がっている。

お心を反射する（お心の言語化）

常に僕らは、彼らをどのように理解したのか、その行動をどう受け止めたのかを彼らに伝え続けなくてはならない。自分を解ってくれようとしている他者の存在を伝え続けなくてはならない。それは言語化から始まる。

さらにその中でも特に重要なのが、否定的感情の言語化である。【資料 19 そう彼女は怒っていたのだ】羨望、怒り、寂しさ、わがままな気持ち...、これらの感情を職員が言語化することにより、否定

的な感情を持っていいこと、感じていいことを安心とともに学習していくのである。そして、それがその人のあるがままを認める姿へと通じていくのである。

お心主義辞典の作成

臨床現場から得られた知見を基に、身体症状、行動等から汲み取ることができる本当の気持ちをリスト化し、まとめ、お心主義辞典を作成する。【別添資料 お心主義辞典】

その人語辞典の作成

支援者は、メンバーさん方それぞれが示す、最初は訳がわからないような行動や発語に、経験やエピソードの積み重ねの中で、一定の意味を付与していくことができなければならない。支援者は代弁者の地位に止まるのではなく、通訳者として最後は機能しなくてはならない。主体は彼らにあるのだから。厚い辞典が用意できれば、その方とのコミュニケーションがいかに豊で、スムーズなのかをそれは教えているし、貧弱な辞典であれば、その方のコミュニケーションが低レベルにと止まっていることを教えている。

社会参加と余暇活動の充実

買い物、外出

本人の主体性を十分に生かした買い物、外出活動は、それ自体が表現であり人生の物語の縮図である。施設内では見られない姿を観察、伝達しながら豊かな生活のステップとしたい。

エーブルアート

絵画、コラージュなどを利用して、自己表現の場としたい。一人では十分な活動ができない方とは、職員との共同制作という形でその表現欲求を実現させたい。

マイチャンネル

テレビを見ない方々は、テレビに興味がないのではなく、自分の好きな番組をやっていないだけなのだ。僕らは、個々のニーズに応える形で様々な手づくりビデオの製作に挑戦したい。

お出かけビデオ、買い物ビデオ、街角ビデオ、乗り物ビデオ、お家ビデオ、行事ビデオ etc.

家庭との連携

ケースワーカーとして

メンバーをともに育む存在として、家庭との連携は欠くべからざるものである。家族の一員として、その家族のライフステージの変化にはともに参加していく必要があるし、遠く離れていてもいつでも自分のことを考えてくれると安心することができる関係を構築していかななくてはならない。職員一人一人がケースワーカーであるつもりで家庭との連携強化を図りたい。

かけはしとして

電話の利用、連絡帳の活用、記録ビデオの利用そして帰省のかたち等を通じて、施設という場所において彼らが何を考え、何を願い、何をしているのか、また本人たちの伝えられない思いとは何かを彼らと保護者のかけはしとして機能していきたい。母親から父親へ、夫婦の間から兄弟間へ、どんどん広がりを見せていく彼らの人間関係全てに、自分たちはかけはしとして機能していくのである。【資料21 父親もまた大切なもう一人の親であったということ】

地域に息づく施設として

ボランティアとの連携、協力

ボランティアの方と連携、協力して、キャンプ、買い物、電車に乗る等のレクリエーション活動を充実させる。特に障害の重い方々の外出については、小集団活動を基本として活動しながら（おもしろプラン）彼らの本当のニーズを探り続けていきたい。

小中学校との交流

旭ヶ丘、緑ヶ丘中学、伊賀良、竜丘小学校の児童生徒の皆さんと、行事、交流会、シーツ交換、アルミ缶収集、ひのき磨き、製品販売等を通じて交流を図る。それぞれの学校には、CAN&CAN 通信、WHITE CANVAS のような広報誌を作成し、情報のフィードバックと発信を行っていく。

ふれあいパートナー

保護者の来園が困難な方には、行事当日、ふれあいパートナーと称して国際ソロプチミスト等のボランティアの方々にご協力を頂き、保護者代わりをお願いする。

飯田高校プラスバンドふれあいコンサート

年1回（3月下旬）明星学園メニューを用意したコンサートを開催する。

地域参加

旭ヶ丘中学校文化祭（かやの木祭）等に出かけ地域参加の一場面とする。

作業製品の販売

市役所、合同庁舎の販売を中心に、作業製品の販売を行なう。製品作りに携わるメンバーさんが販売員として参加する。

知的障害福祉の拠点として

臨床動作法飯田月例会

臨床動作法飯田月例会を中心にして、動作法、動作法的な係わり方、重い障害がある方々の主体性について研究、啓蒙に努める。

飯伊圏域合同ケース研究会

飯伊圏域合同ケース研究会を主催し、積極的に実践を報告していくとともに、地域への啓蒙を図る。

療育研究会のオープン化

職員の自主研究会である療育研究会をできるだけ地域オープン型の開催とし、研究、啓蒙を図る。

11者合同研修会

飯田養護学校、知的障害関係施設、児童福祉施設、共同作業所を含めた研修会を共催していく。

高めあう存在としての職員集団の在り方を求めて（別紙スーパービジョン体制参照）

クラス支援内容研修

必要に応じて計画、実施し、支援内容の統一と支援技術の向上を図る。

療育研究会

職員の自主研究会である療育研究会を組織し、福祉、心理学などの研修を行う。

弘済セミナー

職員を派遣し、先進施設の実践を知る。

抱っこ法セッション

「抱っこ法」のセッションの実践を通じて、心を癒すこと、誰でも人生には背景があること、自分たちの身は、叩けば埃が出て来る身であること等を実体験し、これからの支援内容の在り方について研修を深める。

マカトン法

「マカトン法」を実践の中へ積極的に取り入れ、表出言語の少ないメンバーの方々の有効なコミュニケーション手段となるような研修を実施する。

介護技術研修

メンバーさん方の高齢化、重度化に対応した介護技術の習得を目指す。

健康の維持増進と安全の確保・事故防止

気安さと気楽さ

常に緊張感のある支援を展開し、事故防止に努める。職員間が気安いのは良いが気楽な関係は禁物である。現在までの事故発生例に分析を加えることによって事故防止体制の徹底を図る。

関係機関との連携

関係医療機関との連携に努め、適切な服薬について常に検討を加えていく。また、日頃の健康管理にも十分に注意し、血液検査、脳波検査などの計画に基づいて確実に実施していく。

個別的な配慮

単なる西洋医学的な対症療法的な対応に留まることなく、マイナスイオン毛布、アルカリ水、養命酒等その方の立場に立った対応を研究していく。

個別支援計画 豊かな人生のための個別的QOLリストの作成（別紙QOLの7分野参照）

メンバー個別に「豊かな人生のための個別的QOLリスト」を作成し、生活の豊かさ、充実度をチェックしながら今後の暮らしの在り方に常に検討を加える。

個別支援計画 ほっと安心、ふっと嬉しい日常生活支援ガイドの作成

メンバー個別に「ほっと安心、ふっと嬉しい日常生活支援ガイド」を作成し、忘れてはならない支援の方法、心づかいの内容を明確化していきながら、自らの係わりの質の向上と発展を図る。

ケース検討集「ここまで歩いてきた大切な道」の作成

職員会議等で作成したケース検討資料、職員会議でのディスカッション、スーパービジョンの内容等一年間の職員とメンバーさん方の成長の証として作成する。後輩職員に多くの示唆を与える冊子となるであろう。

パートナーズガイドの作成

交流会、ふれあいパートナー、実習生等の方々が、良質のお付き合いが提供できるために、一目見て、そのお付き合いの方法が解るような「パートナーズガイド」を個別に作成する。